

当原稿は歴史資料をもとにしたフィクションである。

作 秋山俊行

古美術商の大崎陽介は本腰を入れて蒐集品の整理を始めた。昨年までは浜松の郊外に平屋を借りて商っていたが、退院後は市街地の自宅近くへ引っ越してきた。三階建てビル一階フロアは買取りが山ののように積み上げてある。本人にとっては段取り良く並べたつもりだ。

久しぶりに寒さが和らぎ、古びた灯油のストーブを切って、思いついた古書を片っ端から取り出しては書名を確認している。その動作はてきぱきとしており、リズムカルでもある。既に傘寿を越えたが眼と耳だけが若いころから自信があり、未だ老眼鏡もかけず字を追うことができる。そのうえ髪も黒々として人の良さそうなおじさんと見間違えうほどだ。

そのうち、積んだはずの古書が何かの弾みで崩れ、手元に一冊の小型本が残った。

書名は「河合象子遺稿」とあり、今日の探し物の一部である。昭和六年発行の非売品で著者は河合象子、発行者は鈴木庫太郎である。銀色の布張りで著者の故郷にちなみ、曳馬野の萩を描いた上品な装丁は著者、発行者共々の人柄を表わしているようだ。

この本をはじめとした河合象子関連資料は地元顕彰団体が保存していた個人の遺品で、団体が活動し始めたきっかけになったものだった。経年で団体の活動にも陰りが生じ、関係資料はいよいよお蔵入りとなることを大崎が引き取ったものだった。

顕彰団体が集めた資料には庫太郎が象子に対して敬意を払い生前に受けた恩恵に感謝している文面があった。大崎は象子の生涯を語るには庫太郎を知ることであり、その人生にも興味が広がった。

庫太郎は明治三十一年（一八九八）帝大法科を卒業後、日本銀行に就職し、まもなく海外実務研究の名目で夢のような時間を描いて英国に渡航した。

だが日銀ロンドン支店では通常業務を任せられ多忙な日々を送り実生活は華やかどころか惨めで常に悲哀を感じていた。

「何しろ当時の留学生はポテトとパンばかりの生活で、その貧弱さ加減で話にならないほど、彼は最初と当てが違い大いにしよげていた」

後日談として同僚が語っていたという。

ところが、ある日突然歴史の大舞台に飛び出すような仕事が舞い込んできた。

明治三十七年（一九〇四）二月、日露戦争勃発と時を同じくして日本は戦費調達のための外債募集に動き出し、日銀副総裁高橋是清、秘書の深井英五ら一行がニューヨーク経由ロンドンにやってきた。

ロンドンでは横浜正金銀行支店の行員が外辺の事務手伝いをして

いたが、十一月には日銀の行員が代理店たる横浜正金銀行監督のため駐在することになり、更にいくらかの加勢を頼んできた。その中に庫太郎が含まれた。

一転して業務は札束勘定や金庫番から外債募集に関する事務取扱をする事になった。とはいえ、外国との交渉は専ら高橋是清、秘書の深井英五らが行い、機密事項以外の事務手続きは加勢の行員が行った。高橋は云うまでもなく交渉の計画、市場観察、条件の商量等に力を注ぎ事務は深井が行っていたが、深井の手に余ることがあると高橋は暗号電信や文書の浄書の細事にまで自分でやっていた。庫太郎らは、そのうえでの加勢であって彼らの行動に遺漏がないよう常に気を配って事務を補佐遂行していた。

入行七、八年目程度の庫太郎の眼には彼らの活躍は高嶺の花と映っていた。外債募集も成果を上げ一旦関係者が帰朝するとロンドン支店にも静けさが戻って来た。庫太郎はふと故郷の伯母象子を想っていた。

明治四十一年（一九〇八）七十四歳になった象子は東京を離れ庫太郎の邸に寄寓していた。土塀で囲まれた屋敷は季節の花が咲き誇り、好きな和歌がいつでも詠める。つくづく東京を離れてよかったと年相応の安ど感が心を巡っていた。

同年七月二十三日そろそろ梅雨が明けるかと縁側の硝子戸越しにそぼ降る雨を見つめていると、鈴木家の孫娘が大きな声を上げて廊下を走ってくる。

「伯母さま、お手紙です」

「まあ、そんな大きな声で言わなくても聞こえていますよ」
振り向くと孫は封筒を手で振ってみせた。

「庫太郎叔父様から国際便よ、早く読んでみてくださいな」
象子のもとに庫太郎から国際便の手紙が届いたのだ。

東京にいたころは、手紙が届いたことはない。同居同然だったし、お互い多忙で顔を合わせる事が少ない毎日だった。だがこの日の手紙は国際便の横書きの封筒で初めて目にした。

「おやまあ、これは英語かしら。私にはわからないわ」

象子は驚いた様子でニコニコしながら手紙を眺めていると、側から孫娘が読んであげるといって開封し始めた。中は日本語で書き綴られていた。

「庫太郎から象子さまへ お誕生日おめでとう。お元気で過ごしてください。私がいなくてきつと寂しい思いをしてなさることでしょうね。ロンドンの仕事も大きな山場を越え、こちらの残務処理を終えたら一旦帰朝する予定です」
孫がペンで書かれた字をたどたどしく読み進むうち

「帰朝ですって、何年振りかしら庫太郎の顔を見るのは」
象子の顔が紅潮し笑みが毀れた。

雨が止み庭の樹木の葉からは雫が滴り落ちると、雨音に代わって
蝉の声が降ってきた。

翌年、庫太郎が待ちに待った帰朝の前日である。日銀ロンドン支
店に於いて送別会が開かれている会場に一人の若い男性行員が飛び
込んできた。

「庫太郎さんにご自宅から電報です」

電報を読んだ庫太郎の顔が色を失くし、天井を仰いだ。

「お別れの挨拶中にすみません。大切な伯母が昨夜亡くなったとの
知らせでした」

そう云って庫太郎は次の言葉が出なかった。

「君にはいろいろ世話になった。心からお悔やみを申し上げる。本
日の挨拶はここまでにして、急いで帰朝の準備をしたまえ」

上司は居並ぶ行員を前に機転を利かせて帰るよう説得した。
庫太郎には母親同然の人の死に、じっとしていられない衝動に駆ら
れていた。

翌日、同僚への別れのことばもそこそこにロンドン支店を去る。
帰朝して引佐気賀の自宅にたどり着いた時は電報から既に一ヶ月を
経過していた。

会葬者のいない仏間で家族らから生前の様子を伺いつつ墓参りも
済ませた。懐かしい伯母の身辺の品を手に取り、涙無くして見るこ
とはできなかつた。大学まで卒業させてもらい就職できたのは、伯
母の苦勞なしでは達せなかつたことだった。

滞在数日にして日銀本店からの連絡で庫太郎は現実に呼び戻され
た。本店での業務を再開することになっていた。入行して以来すで
に十年の歳月が流れており中堅行員としての責務は重大な局面に至
っていた。二年前に日本へ帰って以来ロンドンでの活躍が認められ
て、日銀の最新知識を持ちうる行員として評価されていたのだ。

古美術商の大崎は象子に関する遺品の中から、庫太郎が刊行した
「河合象子遺稿」を繰り返し読み続けていた。戦時下という世相の
業務多忙な時代を背景にして、庫太郎が象子の生涯を遺稿として上
梓するに至った理由をもっと深く知りたいと思つた。
遺稿の始まりは江戸時代へと遡っていた。

三河の国吉田の里は今の豊橋市にあたり、幕藩体制下で吉田藩の
藩庁が置かれ、東海の重要な防衛拠点であつた。

吉田城は豊川の流域を背後にもち最後に入った城主は、大河内松
平家である。この城が築かれたのは戦国時代初期の千五百年代と古

く、敷地内の桜も同様の歳月を経ているので古木も多い。中でも天守の西方に広がる馬場付近は、桜の馬場とも称され城下でも知られる桜の名所でもあった。

弘化元年（一八四四年）、十歳になった少女田鶴は、その桜の馬場に近所の同じ年の雪乃と連れ立って、豊川の流れを眼下に治めつつ花籠を持って遊びにきていた。

「早いわね。もうこんなにも散っちゃって」

雪乃は嬉しそうに散った花びらを籠に納めている。

風で散る花びらのほか、鳥が蜜を吸い花の付け根から切り取って落としたものも多い。

田鶴は手に取って笑みを浮かべながら雪乃に見せると、そのまま花籠へ入れる。

二人は右往左往して川べり伝いに上がると、やがて崖上の笹原に出た。笹の葉一面に散ったばかりの花びらが被って雪原のようだ。辺りを見渡すと雪乃の姿がないことに気づき、田鶴はもうこの辺でやめようと思った。

その時だった。笹原に隠れて白い器の破片を見つけた。拾い上げてみると曝されたしゃれこうべの一部のようである。

田鶴は破片を花びらが散りばめられた花籠にそっと収めると雪乃のところまで戻った。

「ねえ雪乃ちゃん、これ見て美しいでしょう」

雪乃に籠の中を覗かせると、そのまま自宅まで持ち帰った。

田鶴の父は山中熊之進、城中で砲術指南役を掌っている。母は遠江国気賀町出身（現在の浜松市北区細江町気賀）で旧姓中村いしとい、祖母みとを含めて四人家族で暮らしている。

弘化元年といえは城中では信宝が病死し、十八歳の信時が家督を相続。のちに名を信璋と改めた。このころ、異国船が近海に出没して世の中が騒然としているときで吉田藩の財政もひっ迫して内外とも多難な時期の藩主となった。

邸へ戻ると祖母が縁側で転寝をしている。

「お祖母ちやま見て」

田鶴は得意そうに云って祖母の眠りを覚まし、花籠をそっと差し出した。

「おやおや花びらに埋もれてしゃれこうべが覗いている」

祖母は驚く風もなく、田鶴の顔をじっと見つめた。

「これは昔の大将か、それともなんぞの首の骨かも知れん。うちに置いても詮無いから、どこぞの寺でねんごろに祭ってやるのがよからうぞ」

田鶴は意気消沈しながらも祖母の言葉に従い、父熊之進が帰るのを待って供養しようとした。

熊之進が帰宅後相談し、藩内の寺で供養し埋葬することで落着いたが、その夜田鶴に異変が起こった。

高熱に悩まされ、寝ている自分を見ていよう、自分の体が遊離していく。歩いていく自分がいる。果てしなく目的地に着かない。何度も同じ処をさ迷い留まることがない。これは夢なのかと思つた。

翌日、田鶴は母が体を揺さぶっていることで目が覚めた。

「どうかしたのですか。こんな時間まで床の中にいて。今さっきまでうなされていましたよ」

とうに朝餉の時間を過ぎている。

田鶴は急いで起きようとするが手足に痛みを感じ起きられず、母に応えようとすも声が出ない。

やつとの思いでうつ伏せになり嗚咽した。その日はそのまま床に就いていた。

三日目の朝、竈で飯を炊く母の姿が見えた。田鶴は熱も下がって起き上がり落ち着いている。

「今日は体調が良さそうね。熱が下がったかしら」

母が背を向けたまま云った。

「ええ、今朝はとっても気持ちがよくって」

田鶴が母に応えたその時、竈の中の炎が目映った。途端に不断と違う声をあげ、恐ろしい形相で母の動きを目で追っている。

田鶴は頭を押さえ体を固くしてその場に座り込んでしまった。

「あゝ炎が恐ろし、私は燃えてしまおう」

土間へ降りるなり、張り裂けんばかりの声をあげた。登城前の熊之進が寝間着姿のまま田鶴に近づくと

「私は火が恐ろしゅうございます。あの火は家を焼き、人をも焼き尽くします」

熊之進は田鶴の叫びを押さえ、やつとの思いで寝かしつけた。

「熊之進、田鶴にはどうも憑き物があるようじゃ。火を見ればわが身に燃えつくように覚え、戦の様子が覚えて恐ろしく感じるようだ。霊なのか狐なのかそれはようわからぬが、何かに取り憑かれています」

祖母はいたって冷静に熊之進に説いた。

この日以来、田鶴は高熱が下がっても臥せてばかり、周囲を気にして虚ろな目で会話もなく、食事の量も減り痩せ細っていった。既に二年の歳月を費やしていた。

熊之進はその姿を見るに忍びなく、何か尽くす手立てはないものかと思案の末、田鶴に和歌を教え込むことを試みた。

熊之進は城内では和歌を嗜むことで知られ、号を五百杵という。歌を作ることは心に集中力をつけることになり、歌の定型を会得

すれば自信にもつながる。田鶴が病から抜け出すきっかけになろうと淡い期待を歌作りに求めた。

田鶴に和歌のつくり方を教えると、最初は無表情であったが熊之進の教えは伝わっていた。

そのうち書くことを勧めると、やがて枕元に詠んだ歌が書いて置いてあった。身の回りの出来事を一語一語噛みしめ組み立てて和歌になっていく。

ある日熊之進は田鶴に

「号をあげよう。お前はこれから和歌の小牧だ」

と微笑しながら言い放し、和歌を作った時には褒めた。

弘化三年（一八四六）祖母九十歳の賀に田鶴は和歌二首を作る。

それを見た熊之進は書かれた半紙を手にとつて

「一に曰く、ここのへの坂路やすやす行き行きて百重の山も近き君かな」

と朗々と詠みあげてみる。

「実によい歌だ。小牧は素質があるぞ」

田鶴を前にして褒めたたえた。

だが彼女の表情は変わららず、顔色も冴えなかった。熊之進は不憫な奴だと悲しみに堪えた。

数日後、妻のいしが邸に出入りしている下女がふと漏らした言葉を祖母に訊ねてみたことがあった。

「憑りつかれたとき世間では法華経というものを、一日に千部誦なると必ず平癒するというのが聞いたのですが、本当に治るものか和尚さんに聞いたらいかがでしょうか」

いしは祖母と二人で寺を訪ね、藁をも掴む思いでその旨を話してみた。

「これでやってみなされ。一か八か功德があることを祈ります」
神妙な顔つきで和尚は法華経の教本を差し出した。

翌年の春再び城内の桜が散り始めていた。

熊之進は、最近では田鶴にも変化があり作った歌を詠んで聞かせてくれると喜んでいた。

田鶴の日課は朝から教本を唱え五百回済んだら昼を摂る。

ある日祖母が田鶴の食事の済んだころを見計らい

「田鶴や、これ以上やっても同じこと。午後は声を大きく絞り出して残り五百回を終えたら和尚様のところへ行ってみましょう」

祖母は田鶴に向かって優しく誘った。

「お婆様わかりました。あと五百回は大きな声が出るんです」

突然、田鶴の口から意思のある活舌な返事が返ってきた。給仕をしていたいしの手が止まり祖母と顔を見合わせて啞然としていた。

千部を唱え終えたころには、皆清々しい心持となり、しゃれこう

べの憑き物が去ったと喜んだ。

嘉永六年（一八五三）六月、アメリカ艦隊の浦賀への来航は、鎖国体制下の我が国に大きな衝撃を与えた。吉田藩では異国船退散を祈願するため領地内の惣代らを伊勢神宮に派遣し、足軽・中間を江戸に派遣するなどこれまでにはない騒々しい動きがあった。

安政五年（一八五八）幕府は通商条約を結び、神奈川・長崎・箱館などを開港し井伊直弼大老による安政の大獄などの政治的混乱、外国貿易による経済的混乱のなかで、吉田藩は田原藩との境、百々（どう）村中郷（渥美郡田原町）に防塁を築いて大砲をすえ、外国船の襲来に備えた。

砲術指南役だった父熊之進もこの頃は忙しい毎日が続く。しかし、田鶴が元気になり家の中が明るくなったことで父も城中での仕事に張り合いができた。それに田鶴の将来のために武士の娘としての所作、教養を体得させようといしとともに田鶴を教育した。

田鶴は生まれつき勉強に対し理解と呑み込みが早く、向上心が上がっていくのを快く思っていた。そのことは和歌づくりにも反映し二十歳の頃には大人顔負けの和歌を詠んでいた。熊之進は筋がいいと娘の成長ぶりを城中でも自慢していたのである。

いしは年頃となった田鶴の嫁ぎ先のことと頭が痛い、田鶴が常に朗らかで家事一切を手伝ってくれ自分も助かっているためか、なかなか言い出せないでいる。

最期の藩主松平信古は、動乱期の幕政の一翼を担い朝廷と幕藩体制を何とか維持しようとする幕府のはざまにあつて、悩み多い日々を大坂で過ごしていた。

いずれ熊之進には大役が来るのではと日々神経を研ぎ澄ましていた矢先、体調に異変を感じた。

登城する日なのにいつまでたっても起きてこないのを不審に思っていたいしは、寝所で既にこと切れている熊之進を発見した。二十五歳になった田鶴にとつて、あまりにも突然の別れであった。

安政六年（一八五九）熊之進の弔いを済ますと、祖母は山中家の親戚筋が看ることに、田鶴らはいしの実家である気賀の里へ戻ることを余儀なくされた。

浜名湖北岸に位置する気賀は、田鶴には初めて訪れる地である。吉田を出て姫街道を湖岸沿いに気賀の町へと辿り着いた。

「お母さま、町は商人で活気がありますね」

関所を無事通過し気賀の宿の中心にやってきた田鶴は、興奮気味に母に云った。

「そうですか。母の生まれ故郷は田鶴が初めて見る光景ですね」
母の実家の本陣は、幕府が気賀に設置した本坂通り（通称姫街道

の宿場の中心にある。町の南端には気賀の関所がおかれ、地頭の気賀近藤氏が関所を管理している。

東海道と比べればかなり遠回りであるため賑やかさも華やかさも通るものは地元の人が多く交流が主になる。ゆえに関所の取り調べも緩やかだと言われていた。

もともと本陣は大将が陣を構えるところであり、その宿泊場所のこともである。だが太平の世になって戦乱がなくなれば武士の街道の行き来のための宿泊施設でしかない。

本陣の客は大体が常泊としていたので、なじみの顔ぶれである。だから客の好みを知っており、その時の献立も控えているので次に来るときは至って気持ちよく泊まることができた。

田鶴親子が今後起臥する実家は遠州引佐気賀の本陣であり、主は代々与太夫を名乗って地元の協力を得て宿を運営している。

年頃になった田鶴も悲しみに暮れている暇などなく母の手伝いをして過ごしていた。といつても女の身なので家業の表には立たず裏方が主な仕事である。膳部などを運ぶ手伝いをするときには奉公人に交じって目立たないように気を使っていた。

武家育ちなので言葉使いや立ち振る舞いにも隙がなく、宿泊する各藩の武家たちからは好感が持たれ、田鶴は本陣の娘として生き生きと働いていた。

だが、心穏やかでないのは与太夫である。

年頃のお嬢様をいつまでも仕事をさせておくわけにはいかない。実家へ戻って早一年が経とうとしたころ、いしが父同様突然の病に襲われ田鶴は母を失うことになった。

二十六歳になる田鶴にとつては悲しい別れだが、本陣中村家をめぐる人々の温かい援助のおかげで、これも自分の運命と受け入れ、気丈に振る舞い日々の仕事に精を出していた。

ある時、与太夫と道を挟んだ向いの武家屋敷河合家当主が本陣奥の間で碁を打ちながら何やら話し込んでいた。

「与太夫殿いかがだろう。田鶴様をもうそろそろ嫁に出しては」

「河合様、そうはいっても齢はとうにその時期を過ぎておりますので、なかなか嫁ぎ先が見つかりません」

「それは口実じや。本当は出したきやないだろうが」

「はあ、わかりますか。田鶴は気立てがいいし、それに頭がいい。こんな娘を手放す親がいますか」

「それはよくわかる。しかし田鶴さまの行く末を思えば今決断するしかないだろう」

「おっしゃることはよくわかりますが、それに話が来ないことにはどうにもなりません」

二人は一見世間話のように田鶴を肴にして碁を打っていた。そのうち河合が真顔になって、碁を打つ手を休め与太夫に声を潜めていった。

「実は、わしの故郷の紀州藩から話があつてな。田鶴様を嫁に取りたいというのじゃ」

「それは、それはありがたいことで、ご冗談でしょう」

「ただ少し問題があつての。そのところを理解してのことだが」「まずは話を伺いましょう。内容次第ではお断りするかもしれませんが、その時はお許しをいただきとう存じます」

「相手は紀州藩医で新宮の河合松哲という。現在江戸屋敷詰めだが既に妻に先立たれている。しかも二児がいるのじゃが、いかがだろう」

「後妻に入れということですか。それに残された二児がいると」

「そうじゃ。子は二人とも女の子だ。父親は厳格だが歌を詠み、その才も高いと聞く。それに松哲を勧めた人物は田鶴様が先妻に瓜二つだということだ。話が進んだということらしい」

「そうはいっても、田鶴の親代わりと申しても、こればかりは私の一存では決められませんか」

玄関先が賑やかになつてきた。旅人のお越しのようである。客を向かい入れる田鶴の声が聞こえていた。

本陣の周りは武家の邸が多く、田鶴にもいくつか縁談が舞い込んでいた。ある時、主の与太夫から嫁ぎ先の話があつた。

忙しさにかまけて自分のことなど考えていなかったが、周囲の勧めもあつてありがたく承知した。

田鶴はこの時すでに二十七歳になつていた。まさに遅すぎた春がやつと到来したようである。両親を相次いで失い、気賀の里でも辛いことがある、それでも乗り越えてきた。いつまでも実家に厄介になつてはいるわけにはいかない。田鶴は自立の道を選んだのである。

嫁ぎ先は紀州藩医新宮の河合松哲の後添いとしてだった。

文久元年（一八六一）四月六日早朝、本陣前に近所の者から本陣の雇人まで五十人ほどが集まつている。

当主が玄関先で宿泊していた一人の武士を送り出している。

「こたびはお泊りいただきありがとうございます。井伊谷の御用は無事お済になつたのでしようか」

当主は武士に笑顔で問いかけた。

「おかげさまで官司の配慮で早々に済ますことができました。それにしても今朝の表の賑やかさは何事かあるのですか」

「我家の娘の門出で近所の者たちが祝い見送りに来てくださつてい

「それです」

「それは誠に喜ばしいことで、私も好い日に出くわしたものだ」

武士は当主に一礼してさっさと旅立っていった。

この日、田鶴は江戸の嫁ぎ先へ下るのである。居並ぶ見送人を前にして、当主と太夫は挨拶を始めた。

「今日は本陣の娘田鶴の新しい門出である。これより同行者とともに江戸へ立つ。本日は早朝から見送りありますがどうぞございます」

と神妙な顔つきで挨拶を述べた。

続いて田鶴が挨拶をするが自然に涙が溢れてきた。精一杯の礼を皆に述べたつもりであった。

田鶴の旅の同行者には本陣の下男の喜助が選ばれていた。

下男といつても番頭に近い存在で田鶴を無事に江戸まで届ける任務がある。小柄だが五十歳絡みの初老の男で、律儀で力もあり機転が利く。田鶴にとっては願ったり叶ったりの人物を当主が選んでくれた。

喜助は不断の旅装束で振り分け荷物を担いでいく。田鶴はいたって軽装で菅笠に着物の裾を細紐でたくし上げ、足袋にわらじで肩に風呂敷包を斜めに掛けていく。一日に歩ける距離は八里から十里程度、目的地の江戸藩邸までは十日を要する日数だ。

「そろそろ出発しよう」

当主の一声で先頭を立って歩き始めた。田鶴は用意された駕籠に乗り、側を喜助がついていく。そのあとを見送りに来た親戚衆をはじめ近隣の者たちが別れを惜しんでついてくる。中には子供達も混ざっていた。本陣で田鶴から教えを受けていた者達である。

田鶴は吉田城下の武士の屋敷で生まれ、親から生きる上に必要な教養を身につけてもらっていたので、本陣の別邸が空いているときは近所の子たちを集めて字や和歌を教えていた。

何時の間にか見送る行列は膨らみ、曲がり松に着く頃には三十人を数えるほどになっていた。

ここ曲がり松は三方ヶ原台地の取り付けにあたり、いつの頃からか気賀へ入る者出て行く者の峠ともなっており、見送りもここまですと意思表示をする場所でもあった。

「それではみなさまお別れです。お達者でお暮しください」

田鶴が別れの挨拶を済ますと喜助が田鶴に駕籠に乗るよう促すが、田鶴はそれに従わない。一緒に歩いていくというので皆に手を振って別れとした。

「いい別れになりましたね。江戸へ行っても皆さんを悲しませないよう頑張らなくては」

田鶴は自分に言い聞かせるようにいった。

喜助は泣きじやくりながら

「これから本陣が寂しくなりますなあ」

「そんなことはありません。私がいなくても皆さんで盛り上げてい

つてくださるでしょ」

田鶴はあたかも当主のような口ぶりで慰めるので、喜助は苦笑いをして

「そうですね。此度はあつしが無事お嬢様を江戸へお届けしますんで。それで田鶴様への恩を返させていただきます」

「まあ、喜助さんたら、そんなに調子のいいことを言つて。ともかく江戸までよろしくお願いします」

「へい合点で。今日は無理せずに頑張りましょう」
まさにいい日旅立ちであつた。

街道筋はどこも桜が満開で、行き交う旅人が花を愛でている。二人は姫街道を見付宿まで目指し歩みを進めた。

天竜川を渡船で越え、しばらくすると

「田鶴様、見付の宿に着ましたよ」

喜助は前を行く田鶴に呼び掛けた。日暮れまでには間があつた。
「朝が早かつたから今晚はここで泊まりましょう」

田鶴は笑みを浮かべて応えた。気賀の宿から見附まで歩行距離は五里程度、当時の旅人の一日の歩行距離が八里から十里なので田鶴一行のこの日の距離は意外と少ない。心労もあり無理はせず喜助にとつてまずは至極上々と緊張が解れてきた。

「せっかくですから見付の天神様にお参りしましょう。聞いて知つてはいますから来たのは初めてなので」

宿を決めたら二人は宿場を散策する。神社への参道はおりからの満開の桜に人出が多く、露店の店も様々で賑わつていた。

見付天神では田鶴は旅の安全と嫁入りに幸あれと祈つた。帰り際に、田鶴が醤油の焦げる匂いに気付く

「まあ、おいしそうな匂いだこと」

団子屋の前まで来ると喜助が嬉しそうな顔をして
「団子でも食べていきましよう」

と財布を取り出そうとした。その瞬間、背後から近づいてきた男に財布をもぎ取られ、泥棒と叫ぶが後のまつりで人影は走り去つてしまつた。

「お嬢さま、団子が食べられなくて申し訳ありません」
と喜助は肩を落として田鶴に謝つた。

二人は旅の初日から災難に会うなんて、今しがた神様に旅の安全祈願をしたばかりなのにと落ち込んだ。桜見物もそこそこにとぼとぼと旅籠に戻る。

女中が出てきたと思つたらすぐにまた番頭を呼びに入つた。

「中村様、早いお戻りで神社は桜で賑やかだつたでしょう」
番頭がにこやかに顔を出し二人の労をねぎらう。

「先ほど通りすがりの旅の方からお届け物がありました」

手に持った袱紗を開きながら、

「この財布はお連れ様のものではありませんか」

二人は顔を見合わせ哑然とした。

「今さっき盗まれたものだ」

と喜助は言い放ち、失ったはずの財布が中身も取られずに戻って来たので、その晩は上機嫌であった。

一方、田鶴にとっては幸先がいいどころか、ちよっぴり道中の危険を知って今後の不安材料が見えてきたようである。

見附の宿を払暁に発つ。

街道には満開の桜並木がうつすら見え、わずかな風に枝が揺れている。まだ誰もいない街道を二人は次の宿を目指して歩き始めた。

掛川には意外に早く来ることで、喜助がもう少し先まで行けるからといって日坂まで行くことに田鶴は従った。だがこれからの道は坂あり、谷ありの山中である。

ふたりが坂のあたりに差し掛かった時、無精ひげを伸ばした駕籠かきから声を掛けられた。

「お二人さん、これから先は厳しい坂だ。もたもた歩いていると日が暮れちまうぜ。駕籠はどうだね」

「お嬢さま、ちようどいいところで駕籠屋です。いかがですか」

喜助はこれを利用すれば案外早くに次の宿に着くと思いい、田鶴に聞いてみた。

「わたしは歩けますので、そんな心配はご無用です。駕籠屋さん他の方に頼んでみてください」

駕籠かきは断られたことに気を悪くし、もう一人の男が声高に言った。

「他の方なんてどこにもいやせんぜ。あんたらに聞いているんだ。せっかく気を利かせて声をかけたがお断りときちや、俺たちやあがつたりだあ」

喜助は雲行きがおかしくなってきたので

「そういうわけだから、他をあたってくれ」

駕籠かきの一人が持っていた棒で喜助の脛を思い切り叩いた。

と田鶴は喜助の打たれた足の血止めをする。

「ばか野郎。覚えていろ」

喜助らに捨てせりふを吐いて去っていった。

田鶴らは駕籠かきが去ったあと、息を弾ませ先へ急いだ。

「喜助さん、みてごらん。さっきの駕籠かきが寝ていますよ」
「いや、寝ているのではなくて気を失っているんです。また誰かと喧嘩でもしてやられたのではないですか」

「そうですね。道中私たちも用心しないといけませんね」
「田鶴様これから先は下りです。そして大井川の渡しです」
この日の泊は岡部の宿であった。

四日目、岡部から由比宿を出て蒲原あたりに差しかけた時、道中を行き交う旅人の不安そうな話声に耳を傾けていた。
先日の雨で増水の富士川は渡舟が出ないらしいという。
午後になり再び歩き始めると、雲行きがおかしくなってきた。

「田鶴様、ここはいったん雨宿りをしましょう」
喜助が庇のある街道筋の家を探した。

小一時間もするとこの雨は止んだかに見えた。周りの旅人たちもみな庇のある所に避難していたが、空を見上げながら歩きだしていた。

田鶴の言うように一時的な雨だったようで、それからは気にすることなく先を急いだ。
岩淵の一里塚に着く。先を急いでいる旅人の姿はないのに岩淵宿の街道が妙に賑わっている。喜助はその不自然さを感じながら渡船場へと向かってみた。

「田鶴様、これはいけません。この水嵩では舟は出ませんよ」
周囲を見渡すと川渡しの人足の姿が見えず、舟が岸にあげられて係留されている。

しかたなく岩淵宿で宿を探すことに決めた。だが宿はどこも一杯で断わられる。相部屋もとれず喜助はいったん蒲原辺りまで戻るか、野宿をするかの選択を迫られていた。

二人は街道はずれの祠に腰を下ろし思案していた。夕刻近く雨が降り出し心細くなってきた。喜助の腹の虫も鳴き出した。

「あ、う、中村本陣のご一行様でしようか」
「はいそうです。中村の者です」
番傘を差した商人風の男が彼らに近寄ってきた。

田鶴は一体こんな時に何だろうと不審に思っていたが、
「岩淵の小休本陣の番頭の嘉平と申します。実はあるお武家様から部屋を分けてやってくれとお申し出があり、当方も本日は随分と部屋が満杯のところ、お武家様が小部屋へ移るので空いた部屋を貸してやって欲しいと申しましてお伝えにあがりましてたわけでございます」

嘉平のことばに後光が射していると田鶴は思った。
喜助は飯にありつけるとあつて小躍りしながら立ち上がった。

「お嬢さま、こんなことがあるんですね。地獄に仏とは言いますが、ありがたいことで助かりました」

喜助も有頂天になり、二人は嘉平の後につづき本陣宿へと急いだ。すでにさきほどまでの雨も止み、街道には宿の提灯が点き春の宵を醸し出していた。

十日から十三日までは順調な足取りで十四日保土谷を早朝に発ち品川宿を目指す。

品川本陣にはすでに話がついていて、到着したころには大名行列でもないのに当主がわざわざ出迎えてくれていた。

江戸の紀州藩邸から嫁入りの者が来ることが知らされていて、紀州藩から田鶴宛てに文も届いていた。

翌日、田鶴は宿に届いていた衣装に着替えて迎えを待った。

まもなく、駕籠と一人の武士が到着した。

「中村田鶴様、お迎えにあがりました。私は紀州藩士小中村清矩でございます。今般は遠路はるばる無事にご到着お疲れさまでした。

これより先は私が嫁ぎ先までご案内仕ります」

藩士小中村がそのない和やかな口調で田鶴に挨拶をすると、田鶴は出迎えた駕籠に乗せられ、喜助は駕籠の傍に着く。

一同、本陣の当主に見送られて紀州藩邸へと歩き始めた。

喜助は田鶴の嫁入先は藩医の河合家と聞いていた。藩邸ではないはずだと奇妙に思っていたが、それは間もなく明らかになる。

通されたところは紀州藩の上屋敷、すでに小中村は姿を消し屋敷内へと入っていった。

屋敷の用人に案内され通された広間には二人の男が座っており、田鶴と喜助は対坐した。間もなく藩主が小姓を伴い入ってきた。

小中村が藩主に二人を紹介すると

「そちが此度松哲の嫁になる田鶴か。遠路はるばる大変であったろう。付き添いの喜助もご苦勞であった。何より無事に到着し執着至極である」

藩主が一通りのあいさつをすると、小中村が隣に座る背の高い精悍な藩医を紹介した。そのうえで

「田鶴はこれより河合象子と名乗れ」

藩主が神妙な顔つきで沙汰をする。田鶴と喜助はこれにて祝言にかえたのだと理解した。

「二人ともそんな硬い顔でこちらを睨むな。今日は佳日ぞ。松哲、良き妻をもって幸福じゃな。今晚はゆるりと二人で語り明かせ。それから喜助、新妻を無事送り届けてくれてお礼を申す。帰ったら本陣の与太夫にもよろしく伝えてくれ」

藩主の言葉に小姓が包みを差し出した。気賀への土産のようだ。

「実はのう、お前たち二人の様子は逐一小中村から聞いていたが、わしから二人の旅路を見守るよう指示してあったのじゃ」

藩主が微笑みながら軽い口調で語りだした。

「殿、そのことは無事着いたことですので、今更良いではありませんせんか」

小中村が真顔で言葉を遮ると、藩主は更に話を続けた。

「旅は道連れと申すが、悪党どもも道中には現れる。金の無心から、盗人、詐欺、山賊など様々じゃ。参勤交代でも何が起ころかわからない。そう考えると田鶴一行が無事たどり着けるか、わしは心配じゃった。それにわしの大切な藩医松哲の嫁ともなればなおさらである。そこで松哲の親友である小中村に後をつけてもらったのじゃ。旅の途中思い当たる事があるろう。それはすべて小中村が解決してくれていたのじゃ」

藩主が下がるると小中村からあらためて労いの言葉があり、婿の松哲を交えて広間で今後のことを話していた。

夜は藩邸内で祝いのお披露目が催された。参列するのは紀州藩の夫松哲の身内関係者と知り合いが多く、象子側には喜助だけが顔を出していた。ささやかな祝いの席であったが、和やかな宴が夜半まで続いていた。

次の日の早朝、気賀へと旅立つ喜助を見送ると、象子は一人ぼっちになったと実感した。この時藩医河合松哲三十四歳、妻河合象子二十七歳の春であった

象子は江戸での暮らしにも慣れ、七年の歳月を過ごしていた。その間に、長男の誕生で新しい生活にも張り合いが出てきていた。しかし、ここ最近の江戸は騒々しく、誰しもこの先に不安を感じていた。

元治二年（一八六五）二月、紀州藩主徳川茂承の参勤で再び紀州から江戸勤めになった者によると、幕府を取り巻く情勢は新政府軍の勝利へと傾いており、江戸は戦場になるとの不安が流布されていた。

象子は松哲に、ここ最近元気がないことを訝しんでいた。

「もはや、江戸にいても何もできるわけではない。わしはこれ以上不自由な体になると藩医も務まらなくなる。今のうちに故郷紀州へ戻ろうと思う」

夫の方から話を持ち出してきた。

慶応四年（一八六八）四月二日江戸品川より乗船し、松哲の故郷紀州熊野に向かう。着いた紀州でも戦乱の影響は大きく、市中は騒々しい。

しかし、地元に戻った安心感が自宅の邸で夫も元気に医院の看板を掲げ往診し薬を出していた。象子も幼子を育てながら、できる限り手伝いし、中気の夫を介護した。

そんな日々が続く中、明治四年（一八七一）十一月二十九日町内で火災が発生、その影響で住家を類焼する羽目になる。

いかんせむけむりのよそに立ち出でて
臥す床もなき冬の夜寒を

この時のことをのちに象子は歌に残していた。

自失呆然とした松哲は体調を崩し医院をやめ、象子は夫の介護に努めながらわが子を育てることで生きる望みを託していた。

しかし、不幸は続き二年後の明治五年七月松哲を喪う。失意のどん底に落とされた象子は河合家の親戚筋とも相談し、河合家の縁故をたどって東京へ旅立つことを決めた。

夫の墓は熊野へ残したまま明治六年四月、河合松哲の遺児先妻の二児と象子の子麻枝、泰三を連れて熊野を発つ。象子三十九歳の再旅立ちであった。

やつとの思いでたち戻った東京は、明治維新後大きく変貌していた。

静かだった屋敷周辺の道は拡がり、着飾った男女が行き交い、二頭立て馬車が往来している。夫と暮らした紀州藩屋敷は一部壊され洋式の建物に建て替えられている。

そのうえ新しい住人が住んでいたため、今後は根岸の町で生活することになる。

ここなら親戚筋の温かい援助のおかげで東京暮らしには何の不安もなかった。近隣には河合家の者が住んでおり近所付き合いもよい。象子は子供たちに学問を教え内職をして日々を過ごした。このころ河合氏の先妻の女子二人は他家に嫁がす。

東京暮らしから二年の歳月が過ぎた明治八年、母の実家引佐の気賀からたよりが届く。

差出人は本陣の伯母からだった。内容は近く気賀に新政府のもとで浜松女学校ができるので、戻って来いとのことだった。しかもその学校の教授をやってほしい、ついてはその学校は本陣の邸の中だという。

象子にとって思ってもみなかった良い知らせである。同年松哲の遺児二人を伴い母の実家気賀へと帰った。

谷かげに朽ち果てぬべき探山木も

花咲く春にあへる今日かな

気賀での象子は、授業で忙しい合間でも歌づくりを忘れず、休みにはわが子に教え家族で奥浜名湖の湖岸を歩き歌作りに専念した。春には海原のいざり火に願いをかけ、夏には三方ヶ原台地に輝く弓張の月に昔を偲び、秋には湖のみをつくしに映る月に慕情を知り、冬には引佐の嵐にも耐え朝霜の降りる芦原を歌う。

なごりなく夕日は暮れし海原に

星かと思ゆる海士のいざり火

弓張の月に鳴くなり郭公

とつかつるぎの三方原のうへ

いなさ江の細江に立てるみをつくし

夜ふかく澄める月のさやけさ

いなさ江の細江のあらしさえさえて

朝霜しろし岸の芦原

明治十年松哲との子麻枝が海軍に召集されて九州へと行くことになった。この時、象子は従軍の子をおもう短歌二首を認めている。

宮中歌会初めの御題にも毎年挑戦し、献詠は毎年採用された。

象子にとつて短歌を詠むこと、教えることが自らの生甲斐であることに気づき、一児の母でもあり子のためにも生き永らえようと思っていた。

だが、気賀の本陣には両親はすでになく、自らは教師をして生計を立てているが、おじ伯母が管理する本陣の邸に厄介になっているのは心苦しかった。

それでも親たちの過ごした本陣跡は学校として使用し、夜は和歌の私塾として地域の人を集めて教え、自らも勉強の機会となっていた。

私塾は職業が様々な人で賑わった。年恰好が似た吉野楼の若女将、俳句も熟す瓦屋の顔ぶれは良き友でもあった。ある日象子が吉野楼へ使いに行つた帰り際、細道を下りかけると、神社境内にある楠木に寄りかかり子供が一人泣きじゃくっている。

「あら、庫坊様ではありませんか。こんな時間どうしたのですか」隣家である鈴木家の庫太郎がべそをかいている。

見れば足元は一方が裸足で下駄の鼻緒が切れていた。庫太郎はちよほど七歳になった。この神社は子供たちの遊び場であり、この日は悪戯鬼に交じって遊んでいたらしい。その時転んで下駄の鼻緒

を切ってしまった、山に登る子らに後れを取って仲間外れにされたようだ。

「庫坊様はそんなことで泣いていたらだめ。男の子でしょう」

象子は叱りながら自分の背を貸した。庫太郎はそんな象子の態度に機嫌を直し、舌を出しながら背に負ぶさった。

「庫坊様は大人になつたら、どんな人になるの」

機嫌が直つたらしく坂を下りながら庫太郎に話しかけた。

「僕は勉強して外国に行くよ」

象子は庫太郎の健気にも希望が大きい目標を聞いて、わが子のよう嬉しくなった。

日暮れ間近、夕陽が雲を赤く染めふたりの影を道に映していた。

和歌を嗜む日々は毎年宮中歌会の御題へと挑戦が続く。ある日子に上京する機会が訪れた。宮中歌会のお題の審査をしてきた方からの突然のお誘いである。

象子の短歌に対する情熱とその才能を認め、さらなる能力開花のために東京で学んでみないかとの打診であった。

象子は一も二もなく了承、師に就いて勉強し内弟子となる決意で上京することにした。

その師とは国文学者で宮中において皇族方に歌を教え、しかも大

学教授である小中村清矩であった。かつての紀州藩士であった。明治十五年（一八八二）象子は以前住んでいた根岸町に居を構え

麴町の小中村清矩の屋敷で内弟子として、師の身の回りの世話と和歌に打ち込んだ。

四月一日麴町邸の主小中村清矩は、上野で彼岸桜のもと親友たちとの宴に参加し存分に花見を楽しんでいた。

そのころ内弟子となった象子は主の出張なので、留守にはできず邸で待っている。

十四日、象子は自宅で歌を詠んでいた。外は春雨、何を思いたったのか、台所に差してあった桜花を持って麴町まで出向く。蛇の目傘を差し界隈の景色を楽しみながら歩いていった。

途中、菓子屋で二人分の三色団子を買って求めた。

麴町の邸では主がいつものように書き物をして過ごしているが、持ってきた桜を花瓶に差して玄関に置くと、主は象子の思惑に気づいた。

「何かできたかね」

「主が物静かに訊ねるので買った三色団子の包みを開き
「いかがですか。途中で買ってきたものです。美味しそう」

象子は嬉しそうに応えながら、お茶の支度をした。
主が思いがけない甘い物の出現に顔を綻ばせて無言で食べている

ところで、象子は半紙に書いた歌を差し出した。

主はしばらく考えていたが、「桜は散っても優雅だね。象子の歌には桜の思いが伝わってくるよ
うだ」

そういうしながら、又黙々と自らの書き物を始めた。

しばらくその様子を眺めていた象子だが、主の茶碗にお茶を注ぐ
と、そのまま挨拶をして玄関を出た。雨はすであがり、根岸へと
立ち帰った。

明治十九年（一八八六）八月十九日から小中村家の主は長期の旅に
出て年内中は帰ってこない。この間は内弟子の象子が麴町の邸を管
理する。

主のいない邸は不安であり、そのうえ実子泰三も諸国を巡ってい
て戻ってこない。唯一の楽しみは和歌の集まりである。国学者田中
頼庸主宰の宮中歌会に月ごとに参加するため、寂しい思いも和歌を
日々詠むことで気を紛らわしていた。

やがて、暑かった夏も峠を越え秋風が邸の庭を吹き抜けていく。
どこからか金木犀の香りが漂ってきた。

十月になり実子泰三の死を知らせる便りが象子のもとに届く。

泰三からは全く音信がなかったので元気で暮らしているものと安
堵していたところが突然の訃報である。

それが伊勢の国安濃津で客死したとのことだった。当年二十五歳
の若さであった。

とはるべき人のあととふ悲しさは
たとへむものもまたなかりけり

主が旅から戻って来たのは、暮れも押し迫った晦日であった。
年明けは例年通り年始の客をもてなすこと甚だ忙しく、正月三ヶ
日があつという間に過ぎてしまった。

年ごとに年始の客が増し、六十五歳を迎えた主に一段と人望が高
まっていることを感じていた。この日象子ら弟子には主から短冊本
を渡された。

この本が一杯になるまで短歌を作る努力を求められた。

四日午前、主は文部省へ御用始め。午後は鹿鳴館行き、夕戻れば
弟子たちに会い打ち合わせ。

五日は主が年始回りで一日中不在。象子は主の体を心配していた
が、留守の機会が多いことから自らの短歌作りに励んでいた。

明治二十一年（一八八八）象子は実家のことが気になつていた。叔
父らが住む気賀からの便りが頻繁に届くようになったからだ。何か
と親戚内で悶着があるらしく普段生活が書かれた文面に、その様子

が窺われていた。庫太郎の動向や行く末のことである。月が替わり根岸の家には庫太郎が同居することになった。「伯母様、しばらく厄介になります」

東京の師範学校に入学し帝大を目指すという。象子の家が下宿替わりになった。家族でなくても甥っ子ではお金を頂けない。その代わり生活費として鈴木家からわずかだが送金があった。だが、それ相応に金がかかり象子の負担が増え、金策に頭を抱えていた。主に助けを求めようかと思つた矢先の明治二十二年（一八八九）小中村が学位令で初の文学博士号を授与された。この頃神祇官や内務省に勤務し、皇室典範の制定に関わるなど形成期の新政府に出仕し翌年には貴族院議員に勅選されている。

主は明治時代の国学派の代表的な知識人と位置付けられている。象子はまるで違う世界の人とかかわっているようで、東京で暮らしていることに重い空気さえ感じていた。主の交友関係においても国学者が中心で漢学者や顯官、歌舞伎関係者も含まれている。金策は大切だけれども、庫太郎の周りにはこんなに素晴らしい人格者がいることを伝えるべきだと思つていた。それは名誉なことであるとともに、誇りであることを。

最近、主の邸に頻繁に訪ねてくる若い学者がいた。国学者仲間のひとり落合直文が主の意見を聞きに来る。話が終わると主が玄関まで見送ったあと、元の場所に戻り自分の顎を撫でながら深く考えこんでいる。

落合の来訪で少しは気が晴れるかなと期待していた象子は逆効果だったのかと心持落胆していた。

日常の執務では短冊などの染筆、序文の執筆、論文の雑誌への掲載依頼など学者、文人らしく多忙な毎日である。

玉に学者とは異なる表情を見せることがあり、象子には最も心許せる時があった。「陽春蘆」と刷り込まれた薄葉の十行罫紙を用い、愛用の万年筆で書き込んでいる時であった。

師走に入りこの日は雨、主が文部省へ行くというので、邸の留守居を裁縫で過ごす。主は神田川の知り合いのところまで晩食を済ませ帰宅する。象子を入れ替わるように根岸の自宅へ戻った。

年も暮れ、主から歳暮が送られてきた。鶏卵と海苔一箱であった。

明治二十七年春、庫太郎は東京帝大に入学した。象子は根岸に今までどおり同居してもいいと云う。

年が変わり三月十日、主の邸の紅梅がほころぶ。朝から邸で来客の接待をする。いろんな要件の人が来ると思い主と雑談しながら対

応を検討していたところへ、落合がカステラを土産にやってくる。本日の不意の客である。

「これ本日のお茶菓子。象子さんも一緒にどうですか」

「主が好きなものをよくご存じですね」

「そりゃあ、だれでも年をとれば甘い物が好みに決っています。私はまだ四十代だからお付き合いはしますよ」

落合は楽しそうに胸を張ってお道化て見せた。

「君はまだ四十になったばかりか。私はもう五十になったのかと思つていたよ。言うことが年寄り染みているからな」

「ご冗談でしょう。実は以前にお話しした件ですが少しご意見を伺いに来ました」

主は了解したという顔をして頷いた。

象子は台所で洗い物を片付けながら何気なく話を聞いていた。「先生もご存じのように今年「あさ香塾」をつくり、これまでの歌壇の構造改革を提唱しているのですが、昨年門下生になった与謝野寛君が我家に住み込みで頑張っています。しかし、彼には彼の迷惑があり、森鷗外に近づき大町や尾上柴舟らと交流を深め、宮中御歌所派批判を始めました。私は困り果てていますよ」

「与謝野君は二十歳になったばかりではないのですか。なかなかの大物ぶりですね」

「今すぐどうのという話ではないのですが、これから様々な革新論が発表されるのでしようね」

「君は君で短歌革新論を具体的に実践していけばいいのであって、彼らがそれを批判するのならそこから時代にあつたものを取り出していければいいのでは。あくまで両方で発展させていく」

「確かにこれまで歌壇では新しい試みがされたとはいえ、組織的に運動がおこったという事はありませんでした。おそらく彼らはいずれ新しい歌壇結社でも創って私のところから去っていくのでしようね」

台所から象子が顔を出し、再びお茶を入れに来る。

「話が長くなつたけど象子もこちらへきてお茶を頂きなさい」

主が二人の談義に加わるように薦めたが象子はあまり気乗りがしなかつた。

象子は六十歳の還暦を迎えた。主で和歌の師匠である小中村清矩は七十二歳になっていた。

象子とは歳が一回り違うが、常に健康に気づかい別段体に悪いところはない。女の還暦の場合はどうなのか、自身の体にも気を配る必要を感じていた。

七月の暑い盛り、主から邸へ来るよう頼まれていたので時間の指定はなかつたが朝早いうちに出向く。

象子は玄関を開け庭の掃き掃除をしていると、老人二人がしゃべりながら邸に戻ってくる。自分の思いとは裏腹に帰ってくる姿を見つけて

「あら、早いお帰りですこと。もう用事がお済になつて」

象子は明るい声を掛けると、主が近づきながら買ってきた朝顔の鉢を見せた。薄紅の花が目いっぱい開いている。

「暑いからね。朝早ければ気分がいい。今しがたこの老人と入谷へ朝顔を見に行ってきた。陽が上がってくれば朝顔は萎んでしまうからね」

と言いながら同道した連れ合いを紹介する。国学者の伊能高老であつた。自ら字名は景福だと名乗つた。

邸前に三台の車が用意され八時ころより上野方面へ行く予定である。象子もその中に加わっている。

そのため今日はめかしこんで年を隠そうとしているのか、浴衣の柄を恥ずかしながら派手にして見せた。二人の老人は気に入つてくれたようだ。

まずは上野東照宮社前の茶店に寄り歌を詠むことになっている。だが着いてみると

「申し訳ございません。本日は座敷がすべて貸切りです」

一言で車夫は断られてしまった。仕方なく次は谷中の諏訪社へ車を走らせた。生暖かい風を切っていくが車中では風が多少は和む。

着いた諏訪社は上野より飛鳥山に通じる高台にあつて、四季の眺めがよく文人墨客に親しまれ、この季節は見晴らしがよいうえに涼しい。主が好きな場所であり神社の祠官は知り合いでもある。

挨拶をした祠官は待っていたらしく、一緒に社務所まで案内してくれる。

「おひさしぶりですな。しばらくここで歌を詠ませていただきますよ」

主は気安く祠官に声を掛けると

「社の一部は修復中でして、皆様にご迷惑をおかけしております。今日はちようど工事がお休みでしたので、どうぞ心ゆくまで歌をお詠み下され」

主とはそのまま談笑が続いている。

昼をここで取らせていただき、一行は夏秋五十題を夕方までに詠み果てていた。

この日は象子にとって最も気を許すことができた日であつた。盆が過ぎたころ象子が主の邸へ行くと、思いがけなく伊能が来ていた。

「あら、奇遇ですわね。先だつての歌会はお疲れさまでした」

「こちらこそ楽しい一日を過ごさせていだいた」

伊能は軽く受け流すようにあいさつをし、目尻を下げていた。

象子の要件は、主に歌を添削してもらおうつもりであったが、何やら書き物で忙しく、伊能がときどき口を挟んでは口論をしている。仕方なく出直そうとすると、主の手が伸びて象子の半紙を掴んでいる。た。そのまま無言で添削し、

「象子、これでよい。あとで清書したら送ってくれ」

象子に半紙を戻し再び伊能と話始めた。象子は何やら複雑なわけでもあるのだろうと解釈し、この場は引き下がりに礼を言って邸を出た。ここ数日は晴天続きで太陽が眩しい。小高い丘の緑陰に涼を求めた。

昨年の二月頃からコレラが全国的に再び流行し、四万人余が死亡したと新聞が連日報道していた。この年のコレラ流行は他の年と状況が異なり、日清戦争の帰還兵や軍役夫が大陸などから感染して帰国したのがきっかけである。

この年の東京市内の患者総数は三千人を超え、その内二千五百人以上が亡くなっていた。コレラは死に至る病として人々の間に認知された。

明治二十八年（一九九五）十二月、落合直文が弔辞を読んでいる。「小中村清矩先生の棺の御前に落合直文、もとの古典科の国書課出身の人々にかわり、一言もうす。先生は常に衛生に御心をとどめられしかば、百歳までもとたのみきこえつるに、かく、われわれを見すてたまひて、みまかりたまへるなど、そもそもいかにぞや。かくとききしおりは、きも心もきえいるやうなりしが、かくてあるべきにあらねば、おのもも手をわかつて御葬儀のことどもにいたつきあへり」

谷中の葬儀会場に肅々と響き渡っていた。何ということか、象子には想像を絶する出来事であった。

片時も健康に留意することを忘れなかった主は、七十三歳である世へと旅立ってしまった。一説にはコレラの感染によるものだと云っていたが真意は定かではない。原因はともかく現にこの世には生きてはいないのである。

翌年、小中村清矩追悼歌会が催され、会場に集まった御歌所の人々に交じって象子の歌が披露されていた。

あまかけるたまの行方をしたふまに

帰らぬ年は十年へにけり

会の終了後、象子に新たな空しさが襲ってきた。

明治三十一年（一八九八）庫太郎は無事帝大を卒業し、日銀への就職が決まる。

象子の念願が叶い、わが子のよう喜んだ。

だが、これは庫太郎との別離の日が来たということであった。「伯母さま、そんな悲観的な顔をしないでよ。日銀に就職が決まったからと言ってこの東京から出ていくわけではありませぬし、このまま居させてください」

「庫坊様、それはありがたいけど、あなたはこれで一人前になったのですからどこかに住まいを構えるべきです」

「でも東京は広いし勤め先を考えると、この家が最も好都合です」
庫太郎とはこんな議論の末、当分の間根岸に同居していく事で落ち着いた。しかし長続きはしなかった。日銀の海外実務研究の名目でロンドンへの特派が決まった。

晩夏の午後、象子は和歌の私塾で指導を終え浅草からの帰り、鉄道馬車で上野駅まで来た。ここからは何を思ったのか自分の足で歩き公園の方へと向かう。

普段通りの道すがら故人の主小中村との日々を回想していた。この道も何度か二人で歩いたことがあった。主の友人先への届け物やべら歌会の帰りにそぞろ歩きを楽しんだことも。だが主はあまりしゃべらない。寄り添いながらも別々に歩いているようで会話の度にお互いが頷いているだけであった。

動物園入口近くに來たら今日は休みのようだ。老人と子供が門の前で

「お菓子でも買ってやるから今日は動物園をあきらめろ」
とでも言つて老人が孫を慰めているらしい。

庫太郎がこのくらいの歳だったら自分でも同じことを言っていたかもしれない。足取りが重くなり、ふと涙が込み上げてきた。

やがてパノラマ館前に近づくとも楽隊の演奏が聞こえ、軽快なリズムについて足早になつていたのが、自分でもおかしかつた。林を抜け下り坂になると、つくつく法師の鳴き声が降つてきた。

象子は主なき時代をどう切り開いて歌を詠んでいくのか悩んでいたが、結局、旧派のまま伝統を重んじ、「石室の舎」私塾を開き皇族方に歌を教授していくことを心に決めていた。

都人春や知るらむもしきの

大内山のかすむひかりに

明治三十五年（一九〇二）六十八歳になつた象子は、かつての主君水野忠元の娘に和歌を教えていた。一昔前なら旧派の御歌所の面々

と交流し、それぞれの意見を分かち合っていたことを懐かしんでいたはずである。この年になっても交友関係は若いころの歌会所の人ばかり。それも年々亡くなっていく日々、心に病んでいた。若者にも多忙な毎日を過ごすうち、たとえ時代が様変わりしても若者に自らの経験と教訓を引き継いでいきたい。

春浅み霞も薄き大空に

羽袖ゆたかに鶴の立ち舞う

だが、その思いはいっになつたら達せられるのか。今の東京には頼る人もいなければ、頼られることもない。象子はいずれ「気賀へ帰ろう」と思った。

いつものように私塾の帰り、突然どこからか琴を掻き鳴らす音が聞こえ足を止めた。余韻があまりにも悲しげであった。

一方、主がいなくなり話し相手がなくなつた落合直文は短歌革新の心を抱きながら歌文の浅香社を創立し私塾を開いた。そこに集まつたのは与謝野鉄幹、尾上柴舟、金子薫園らであった。もはや、それまでの旧派の歌人の姿はなく短歌革新運動の推進者たちでばかりである。

これは始まりであつて、あくまでも中核をなしていくのは与謝野鉄幹が結成した「新詩社」であり、ここに正岡子規率いる「根岸短歌会」が合流した。現代短歌に発展する源流となつて行つたのである。かつて主とも再三にわたり議論の末、構築した落合の提唱は大きな礎でもあつた。

明治四十一年（一九〇八）七十四歳になつた象子は東京を離れ気賀の庫太郎の邸に寄寓。

明治四十二年（一九〇九）十二月十六日午後四時、気賀町鈴木家に没す。象子享年七十五歳であつた。

臨済宗正明寺方丈導師となり、気賀町字油田なる姪竹田まさの邸内に葬り、寒巖妙象大姉と諡す。

古美術商の大崎は「河合象子遺稿」を読み終え迷つていた。これに象子のすべてが語られている。今さら世に出す必要があるのだからか。象子の墓を訪ねながら考えてみようと思つた。

雨が小止みになることを期待して、ひとり浜松市北区の細江町気賀方面へ車を走らせた。ワイパーは思い出したように動き出しては雨を弾き飛ばしていた。

やがて目的地に到着すると、車内にあつた水玉模様のパラソルを

差し、先ずは庫太郎の生家跡に立ち寄り、その足で菩提寺へと向かった。

正明寺境内の坂を上ると木立に囲まれて一昔前の墓の一群があった。どの墓も姫街道の気賀の町を見下ろしている。その中に庫太郎の墓を見つけると、ほぼ直角に西を向いている墓がひとつだけあった。象子の墓である。

大崎は手を合わせていたが、おもむろに背後を振り返ると象子の生まれ故郷の三州吉田に向かって墓が建っている。暫く墓の向く方向を眺めていた。

それまで降っていた雨が止み、雲間から陽が射してきた。傘を畳むと、しっとりとした空気の中に涼しさが漂ってくる。すかさず蝉の聲が木立の間から一斉に鳴き出し、周囲の静寂を打ち破った。大崎には「迷わず後世に残して」と雨後蝉に背中を押された様な気がした。

雨晴れて真木の雫の漏る山に入日涼しく蝉ぞ鳴くなる

きさこ

(完)